

NEW CROWN 授業実践事例

BOOK 2 LET'S READ 1 授業例①

S.Y. 先生

指導計画表

(全4時間)

時間	学習内容・主な活動
1	<ul style="list-style-type: none">■発表内容の説明<ul style="list-style-type: none">・評価に付いての説明・宿題チェック■pp. 49-50 (物語前半)<ul style="list-style-type: none">・CDを聞き、発音練習・指導者の後についての発音練習・新出単語の説明・音読・本文の説明・音読
2	<ul style="list-style-type: none">■発表内容の確認■pp.51-52 (物語後半)<ul style="list-style-type: none">・CDを聞き、発音練習・指導者の後についての発音練習・新出単語の説明・音読・本文の説明・音読■発表に向けての役割分担
3	<ul style="list-style-type: none">■発表内容の確認■pp.49-52 (物語全文)<ul style="list-style-type: none">・CDを聞き、発音練習・指導者の後についての発音練習、本・文の音読・イントネーション、強勢、語句の発音の確認・練習■グループ練習
4	<ul style="list-style-type: none">・個人での練習・グループでの練習・発表・振り返り

実践例

1. 教材について

A Pot of Poison は、日本の伝統文化である狂言「附子(ぶす)」に原作がある。ストーリーは、平易で面白く、「オチ」のある作品である。それぞれの登場人物に個性があり、小僧さんたちが和尚さんの嘘を見破り、最後にはとんちで和尚さんに逆襲するところは、痛快である。

短い簡単な英語でストーリーが次々と展開していく。「Oh, no.」「What?」などは、よく聞く表現であるが、言い方によって様々な感情を込めることができる。生徒たちの音声表現力を伸ばすには、最適な教材である。

2. 指導計画(全4時間)

【第1時】

CDで物語を聞き、新出単語の説明・音読練習、物語前半の発音練習、指導者の後についての発音練習、本文の説明を行った。

【第2時】

再度、発表内容を確認した。物語後半の新出単語の説明・音読、CDの後についての発音練習、指導者の後についての発音練習、本文の説明をした。

4人班で発表に向けての役割分担を行った。

【第3時】

物語全文のCDを聞き、イントネーションや強勢に気を付けての発音練習。指導者の後についての発音練習、本文の音読練習。イントネーション、強勢、語句の発音の確認・練習を全員で行った後、グループでの練習を重ねた。

【第4時】

いよいよ発表である。まず、個人での練習、グループでの練習の時間をとった。その後、班毎の発表、教師からの講評、振り返りを行った。

3. 授業の前の予習

A Pot of Poison の物語について授業を受ける前に生徒たちに予習課題を与えた。内容は、次の5つである。①本文を写す ②本文を訳す ③物語の感想を書く ④面白かった表現やセリフを5つ英語で書く ⑤新出単語と意味を書き、5回ずつ練習して覚える。

発表を授業に取り入れようとする場合、時間数のことが課題となる。事前に家庭学習で予習をしておくことで、授業を有効に活用できる。また、④の面白かった表現やセリフを5つ書こうと思うと教科書を何度も読むことになり、教材理解が深まったと考えられる。

4. 生徒たちの「音声表現力」を伸ばすには

どのようにしたら、生徒たちの「音声表現力」を伸ばすことができるだろうか？ 同じ言葉でもイントネーションや強勢、言い方によって、全く違う印象を聞き手に与える。

筆者は、「音声表現力」の育成には、次の4つのステップが必要であると考えている。

- ① 正しい発音を聞く
- ② 真似をして何度も練習する
- ③ 自分自身で考え、試行錯誤しながら声に出す
- ④ 自分の英語を人に聞いてもらい、アドバイスを受ける

授業では、常にCDを活用し、ネイティブの発音を生徒に聞かせた。教科書のCDには、ネイティブの正確で美しい英語が収録されているし、通し読みには効果音も入っていて、とても重宝した。「学ぶ」は、「まねぶ(真似をする)」に由来する言葉である。何かを学ぼうとするとき、まずは、徹底的に真似をするのが上達への近道であろう。

5. 音読について

真似をするのに音読は欠かすことのできない要素である。本文の音読は、次のような手順で行った。

Reading (sentences)

- 1 Silent Reading
- 2 CD Listening
- 3 Chorus Reading after the CD
- 4 Chorus Reading after the teacher
- 5 Read and Look Up
- 6 Shadowing
- 7 Buzz Reading

CDのあとについて発音するときは、イントネーション、強勢、区切り等の基本的な英語の音声的特徴に注意し、正しく発音するよう指導した。教師の後に続いて発音するときには、教師自身が多少大きめに喜怒哀楽を込めて音読し、物語のキーセンテンスは、何度もくり返して発音させた。それぞれの登場人物の個性や感情によって表現の仕方も変わってくる。

6. 生徒同士が学び合い、ともに高め合う

筆者の勤務する中学校は、数年前から全校を男女4人班とし、グループでの学習を促進している。掃除も給食も4人班を活用している。そのため、生徒たちは、授業でも抵抗なく4人で活動することができる。

この教材においても発表を4人とし、班での話し合いで役割を分担した。和尚さん、小僧さん、ナレーターそれぞれに声のトーンも言い方も違う。自分のセリフは覚えて、ジェスチャーもつけて発表するよう指示した。

グループ練習では、どのようなジェスチャーがいか、どんな言い方をすればいいのか互いに意見を出し合う姿が見られた。発表では、小僧役の生徒が正座をして、神妙な様子で和尚役の生徒の前に座る姿が見られた。

特に面白かったのは、最後の場面である。小僧さんが「Soon we'll die! Agghhhhhh!」と言って苦しむ場面では、役者顔負けの演技力を発揮する生徒もいた。英語は、あまり得意ではないが、お調子者の男子生徒のAくんは、とても上手に英語を使っていた

と言える。演じる生徒たちも、それを見ている生徒たちの表情も生き生きとして、教室は温かく、柔らかい雰囲気につつまれていた。

7. おわりに

英語という異国の言葉を学ぶのにインプットとして「真似ること」「練習すること」「本文の意味を把握すること」は、大切な活動である。しかしながら、本文が読めて、内容がわかったら終わりとするのでは、その教材の本当の面白さはわからないのではないだろうか。もう一歩進めて、アウトプットの課題を教師が準備し、自分なりの工夫をし、仲間と意見を交換し合い、みんなの前で発表するチャンスを生徒たちに与えることで、教材に対する理解がより深まり、英語を口に出す楽しさも感じられるようになる。

江利川(2010)は、次のように述べている。「教師は教える人、生徒は学ぶ人。この常識が、くつがえりつつある。生徒同士が学び合い、教え合い、一緒に高め合う。自分一人ではできない高度なタスクを仲間と協力して達成する」。基礎基本の知識を教えた後で、次の段階に進んでいく必要がある。また、金子(2012)は、次のように述べている。「スピーキングやライティング活動の大きな課題は、生徒から伝えたい意欲を引き出し、英語の発信を楽しめるものにするることである」。自分の伝えたいことを英語で書いたり、話したりすることの前段階として、「面白い物語を学習し、感情を込めて英語で発表する」ということは、大変有効である。発表活動をすることで、普通の座学では得られない英語の授業に対する興味関心が高められたと実感している。

【参考文献】

- ・江利川春雄(2010)「英語教育に“なぜ”“どう”共同学習を導入するのか」英語教育 Vol.59 No.4 pp. 10-13, 大修館書店
- ・金子朝子(2012)「「伝えたい」意欲を高める指導」英語教育 Vol.61 No.3 pp. 21-24, 大修館書店
- ・永田義直 編著(1980)『一休ばなし(八) 毒のかめ』「子どもに読んで聞かせる日本の笑い話」 pp. 215-221 金園社